

平成29年6月28日(水)

老球の細道338号

プロフェッショナルとは

会津バスケットボール協会 室井 富仁

会津バスケットボール協会主催「アスリート講習会」には毎年たくさんの保護者、指導者の方が見学に来ている。指導する私としては毎回研究授業を実施しているかのように緊張の連続であるが、やる気のある子ども達ばかりなのでとてもやりがいがある。退職後もこのような形で指導を続けられるのは幸せである。

今は昔、アスリート講習会を見学している熟女ママ達が、中学校に指導者がいないので私が退職したらコーチに来てくれますかと冗談半分、面白半分に聞いたきた。「いいですよ。ただし、無料とはいきませんよ」と言ったところ、「エー！」で話は終わってしまった。いまだにスポーツを指導してもらうのに無料をお願いするという感覚はなくなる。都会では、バスケットボールの家庭教師がビジネスとして成り立っている時代なのに。

コーチを天職と夢見る私にとって「プロフェッショナル」という称号は憧れのまตである。プロフェッショナルとはどうあるべきか、ただ単に自分の仕事で飯を食える称号ではなく、もっと崇高で、深遠なポリシーを持つ称号だと思っている。

『プロフェッショナル仕事の流儀・運命を変えた33の言葉』なる本を読んだ。各界の超プロ達が自分の道を究めるうえで指針としている言葉、信念、口癖、思わず発した本質的な一言、そして彼らの生き方を大きく変えた言葉を紹介している。

天皇陛下の心臓手術を執刀した“手術の鬼”と呼ばれる心臓外科医・天野篤は「冥府魔道をゆく」という言葉で自らの境地を表現する。冥府とは地獄を意味し、出口のない暗闇のなかを、誰の助けも借りずに進まなければならないという意味である。プロは自分の蓄えてきた力だけで道を切りひらき、孤独で、厳しい生き様を覚悟しなければならない。

高知在住のデザイナー梅原真は「売れないモノを売る」仕事をやってのける型破りなデザイナーである。その秘密を「マイナス×マイナス＝プラス」と表現する。マイナスというものはオリジナリティーであり、一つの個性である。他にはない特徴であるから特別な魅力になりうる。だから、マイナスにスイッチを入れることが自分の仕事であると言う。個性を引き出し、個性をチーム調和させる発想はコーチに相通ずるところである。

世界遺産のイースター島・モアイ像やエジプトのスフィンクスなどの修復作業を手がける石工左野勝司は地道に毎日の終わりに日記を書いている。作業でうまくいかなかった点を書き残し、どうすれば良いか考える。その後明日へのシュミレーションをする。彼の地道で真摯な取り組みは「10分“今日”を反省し、5分“明日”を夢見ろ」で表される。地道な努力が非凡な人間を創り上げる。プロは一生自己研鑽し前進する。

最後に、サッカー元日本代表監督岡田武史。彼はどのように選手をまとめあげ、大舞台でその実力を発揮させた秘密を「一番大事なことは、腹をくくっていること」と指揮官の覚悟を説いている。個性ある代表メンバーをたばねるには小手先の人心掌握術など役に立たない。要は指揮官が登るべき山に必死になっている姿を見せることだという。人は、聖人君子や頭の切れる人についていくわけではない。腹をくくって高い山に必死になって登っている人についていく。リーダーシップの真骨頂である。

プロフェッショナルは重い。私には無理かな。せいぜい風呂(フロ)フェッショナルか!